



岩波文庫

526—528

新訂

新古今和歌集

佐佐木信綱校訂

岩波書店

昭和四年七月五日 第一刷発行
昭和四年二月一日 第三二刷発行

新古今和歌集

定価★★★

校訂者 佐^さ 佐^さ 木^き 信^{のぶ} 綱^{つな}

発行者 東京都千代田区神田一ノ橋二丁目三番地 岩^{いわ} 波^{なみ} 雄^お 二^に 郎^{らう}

印刷者 東京都新宿区市谷加賀町一丁目一二番地 高^{たか} 橋^{はし} 武^{たけ} 夫^と

発行所

東京都千代田区
神田一ノ橋二ノ三

株式会社 岩^{いわ} 波^{なみ} 書^{しょ} 店^{てん}

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本印刷・田中製本

岩 波 文 庫

526—528

新 訂

新 古 今 和 歌 集

佐佐木信綱校訂

緒言

新古今集の和歌史上の位置

言
和歌の歴史を通観するに、光輝かしい黄金時代は、前に萬葉集時代、後に新古今集時代がある。古今集時代は、この見地よりすれば、萬葉・新古今兩時代の連鎖である。また江戸時代は、これら三時代の復活時代、折衷時代である。

緒
萬葉時代と新古今時代とは、幾多の天才巨匠か輩出して、咲き亂れたる言葉の花、目もあやに、吾人をして憧憬の感に堪へさらしめる點においては同一であるけれども、更に進んで兩者を比較してみると、もとより差異か少くない。しかしこの比較は實は和歌史上に興味の深い問題である。一には時勢に見よ。建國以來漸次に成熟してきた國民の精神か、大陸文化の精華をとりいれて、燦然たる上代文明をつくり出したのは、萬葉の時代である。雄健の意氣に満ちた時代の響きは、吾人はこれを萬葉集の歌調にきくことができる。ひるかへつて新古今の時代はどうか。平安朝優美の文化はやうやう末になつて、夕日に映えるうら紫の藤波の色香は、なほ九重の空に残つてゐる。

でも、驕るもの久しからずして、平家が昨日の榮華を西海の波に洗うた無常の風は、萬人の心にしみわたつた。新古今の和歌の、華麗なうちに一種のいひしらぬ哀調のあるのを讀むとき、誰がここに時勢の反映を認めないであらう。

言

緒

二には作者に見よ。萬葉では、作者の範圍はあまねく上下の階級にわたつて、むしろ庶民的と稱すべきもの、新古今では、狭く朝廷の一角に限られて、ほとんどすべて上流の才子才女か、さもなければ僧侶である。自然奔放の情に、泣くも笑ふも喜ぶも、ただ一むきであつた萬葉作者の性情を、多感多涙、喜びのうちに泣き、涙のうちにほほゑみ、こまやかな觀察と、鋭い情感とに悩み多くも暮した新古今時代の作者に比べれば、誰がその差のいちじるしいことを見ないであらう。全國の富をあつめて、東大寺の廬舎那佛に豪華のあとを輝かし給うた聖武の帝に對しては、天下の政權が幕府に移つた鬱悶の情を、わづかに水無瀬離宮の御遊に遣り給うた後鳥羽上皇がおはします。「をす國の遠のみかどに、汝等し斯く罷りなば、平らけく吾は遊ばむ、手うだきて我はいまさむ」と節度使に給うた壯なる御製を、かの「奥山のおどろが下もふみわけて」と道ある代を願ひ給うた悲痛の御聲とともに誦することができらうか。石見の旅路に妻をのこした人麿の悲しみ、「雨まじり雪ふる夜」に、貧民に同情した憶良が歎き、はた「酒壺になりてしかも」と興じた旅人の心は、攝政良經の「袖に玉ちる」貴舟川の涙でもなく、「尾上の鐘」によ

せた定家の恨みでもなく、はた家隆の「鶯さそへ」のすずろどころでもない。「田子の浦ゆ打出でて」見た富士の姿は、ここには、「霞になびく曙の空」にただよふ烟の美しきとなり、「こぎいでし船の跡なき」思ひは、西行・寂蓮はた慈圓が歌の深きあはれとなつた。もしまた、これを女流に見るならば、或は沈痛に、或は熱烈に、或は真心ふかく、いづれもひたぶるなる情緒をせきあへなかつた笠女郎、茅上娘子、はた安倍女郎の心ざまは、式子内親王、宮内卿、俊成女が、物はかなげに優しいなかにも、才氣あふれて深く思ひ入つたのと、趣を異にする。

しかして、三には、これを和歌古今の歴史に見よう。記紀の混沌時代からやうやう整齊の域に入つて、ここに自然素朴で莊重な上代歌風の隆盛を示した萬葉と、すでに古今集が純雅の趣味を傳へて以來、歌論に、歌合に、百首に、三百年の教養を経、技の圓熟と、想の精緻とが相俟ち、景と情と相ともなつたところに現じ來つた、餘韻幽遠、中世歌風の極致を示す新古今とを比すれば、かれにおける自然單純の美は、ここには技巧複雑の妙となつてゐる。かれに、野に咲き亂れる秋草の色があれば、これには、霞を隔てて見る遠山櫻の句がある。かれは、直情徑行の上古人が、山に野に立つてうそぶいた態を傳へ、これは、教養ある大宮人が、みやびたる勾欄のもとに沈吟する風をとどめてゐる。

かやうにしてこの兩時代は、互に相對して、和歌史上の壯觀である。吾人はここに、ただ簡單

に言ひ及んだに過ぎないが、精しい觀察は、幾多の興味ふかい問題をもたらすべく、更に進んで、新古今時代の歌風が、後世の和歌史における消長、江戸時代における復活の意義等について、注意に價する點も少くないであらう。それは、讀者みづから本集によつて、味讀し研究せらるべきである。

新古今集の解題

言

緒

新古今集は、土御門天皇の元久二年三月二十六日に撰進した。當時院政を執らせ給うた後鳥羽上皇の御意志にもとづいて、源通具、藤原有家、同定家、同家隆、同雅經の五人がこれを撰んだのである。はじめ寂蓮も加はつてをつたが、彼は、命を受けた翌年七月に世を去つた。勅撰集の歴史からいへば、醍醐天皇の延喜年間、貫之ら四人が古今集をはじめて撰んで以來、後撰集、拾遺集、後拾遺集、金葉集、詞花集、千載集を経て、第八番に撰ばれたもので、いはゆる八代集のしんがりをなすものである。

しかして、撰者たちが本集を撰ぶについでとつた方針、及びその經過について述べれば、次のごとくである。

撰者たちが、本集を撰ぶべき命をうけたのは、建仁元年十一月三日である。建仁が三年を経て

元久となり、その二年に本集が成つたのであるから、選出のために費された年月は、約四箇年である。

その選出の方針は、もとより七代集のあとをついで、後世に傳ふべき一大歌集を撰ばうといふ大なる目的からして、主として、歌の優れたのを集めるのを旨とした。

その選出の材料としては、まづ萬葉はこれを用ゐたが、古今以下の七代集にすでに選ばれたものはとらず、それらの作者の歌は、家集その他から別に採つた。殊に本集の特色とすべき點は、

後撰以來の勅撰集とは趣を異にして、後鳥羽上皇をはじめ、五人の撰者以下當時の作者の歌を多く選んだことである。これは、古今集の方針と同じであつて、けだし當時の歌人の抱負の大きかつたことを示すものである。したがつて、撰者等がこの選出に苦心したことは非常なもので、定

家のごときは、その日記なる明月記に、「右日大腫、撰歌之際眼精盡歟」と記してをる。しかし各部を終るごとに奏覽して、上皇の御補正を仰いだが、上皇の外にまた、後京極攝政良經もいろいろ注意や助言を與へた。それで各部の編輯の全くをはるごとに、撰者その他の家で宴を開いて祝うたが、元久二年三月二十七日、即ち全部完了した翌日に、竟宴を宮中の春日殿で開かれたのである。

7
しかしその後も、上皇は、意に満たざるところについて修正され、撰者にしばしば切繼を命ぜ

られた。さきに各撰者が選んで奉つたのを、數度精撰せられ、その結果、新古今集全部を殆んど諳んじられたといはれるほど、上皇はこの撰に熱心であらせられた。

元久二年三月に成つたものを第一次本とすれば、承元三年六月十九日に書寫したものを第二次本とし、承元四年四月二十五日披露したものを第三次本とし、建保四年十二月二十日に書寫し、同二十六日に家長が詳しい識語を添へたものを第四次本とし、公的決定本と目すべきであらう。

第一次本以後の増補歌もあり、作者名も、左衛門督通光、權大納言通光のごとく、相違するものもある。上皇はなほ隱岐において更に本集を精選せられ、四百餘首を削除せられて、千六百首御室本記載によると千五百七十六首である。とし、本集の抄本を作られた。それは隱岐本とよばれてゐる。

かやうにしてできあがつた新古今集は、卷數はすべて二十卷で、部立は、春、夏、秋、冬、賀、哀傷、離別、羈旅、戀、雜、神祇、釋教の十二。和歌の總數は、明確にはしがたいが、千九百七十九首ほどであつたやうである。

卷數二十卷は古今以下を襲つたもので、部立も大體古今に似てゐる。古今にあつてこれにないのは、雜體、物名、大歌所御歌の三部で、新古今にあつて古今にないのは、神祇、釋教の二部である。歌の總數は、八代集の中で最も多く、古今の千九十九首よりも八百八十首、後撰の千四百二十餘首よりも五百五十首以上も多い。

全編二十卷の外に、これも古今の例にならつて、假名文及び漢文の序がある。漢文の序は、藤原親經が、攝政良經の命を受けて記し、假名序は、良經みづからが書いた。文體も古今集序にならつて書いたもので、本集撰定の由來方針の大體が述べてある。

本集の命名は、はじめは續古今といふ説、新撰古今といふ説などがあつたが、續の字は次撰の時に名づくべき字で、續古今は適當でなく、また新撰古今といふときは、古今集の中から新たに選ぶ義となつて、適當でないとして斥けた。いづれにしても、畢竟、古今を模範として、しかも、新機軸を出したといふ意をこめたのである。

なほ、次に述べる本書の底本には、承元四年九月の切出歌をはじめ、五首ほどの切出歌が存するので最後の決定本ではないが、決定本などによつて校合せられたとおぼしく、切出歌にはその符號が附してあり、また隱岐本によつても校合せられたらしく、その註記もある。選出者名は、通具を除き、有家、定家、家隆、雅經の四人が記してある。

凡例

例

- 一、この新訂新古今和歌集は、穗久邇文庫藏鎌倉時代古寫本（傳藤原爲氏筆）を底本とし、明暦元年刊二十一代集本、および文明四年書寫の甘露寺親長本等をもつて校訂した。
- 一、底本に存する誤脱などは校本によつて補正し、括弧「（」を附して區別した。
- 一、底本に存する校異はそのまま傍書し、校合本による異同は傍書してイと註し、更に括弧「（」を附して、底本に存する校異と區別した。

凡

- 一、校合本による校異は、注意すべき程度のものにととめ、微細な異同は省略し、漢字および假名は改めたところもある。
- 一、異體字、古體字、變體假名等は、すべて普通字に改め、歴史的假名遣に統一し、且つ清濁を區別して、濁點を附した。
- 一、各歌の選出者名は、源通具を除き、藤原有家、同定家、同家隆、同雅經の四人に限り、歌頭に「一」「二」「三」「四」と符號が附してあるが、今「ア」（有家）、「サ」（定家）、「イ」（家隆）、「マ」（雅經）と改め、その位置も歌の下に移した。

一、底本の誤脱歌は、系統の近い古典文庫本によつて補つた。

二、切出歌に削除の符號「」が附してあるものは、そのまま記した。

一、隱岐本所載歌は、各歌の上部に掛點（引墨）かあるが、今〇印に變へ、各歌の下に註することにした。卷第六より卷第十まで、及び卷第十六より卷第二十までには無いが、同じく系統の近い古典文庫本によつて補ふこととした。

一、隱岐本の御識語は、底本上帖の奥（卷第十の後）に存するか、卷第二十の後に移した。

一、讀者の便を圖り歌頭に國歌大觀の番號を附した。番號の重複したものは「イ」「ロ」として區別し、國歌大觀不載歌は、その前の歌の番號を附し、括弧「」を加へて區別した。

一、參考のために、諸本に存する確實なる切出歌を一括して卷末に附載した。各歌の原位置は、その前の歌の番號に括弧を附して示すこととした。従つて括弧のないのは、切出歌でありながら國歌大觀等に存する歌である。

一、檢索の便を圖り、最後に五十音順の初句索引を附した。初句の同じ歌は第二句まで掲げ、第二句まで同じ場合は第三句まで掲げることとした。異同の存するものは校異をも掲げ「イ」として區別し、讀訓の決しがたいものは二所に出した。但、「けふり」「けむり」の如く、位置の近接する場合は省略した。

一、本書の校訂等については、久曾神昇・原田敏雄の兩君を煩はした。穂久邇文庫主並びに兩君に感謝する。

目次

緒言……………三

凡例……………一〇

眞名序……………九

假名序……………二

春歌上 (卷第一)……………三五

春歌下 (卷第二)……………三九

夏歌 (卷第三)……………五〇

秋歌上 (卷第四)……………六〇

秋歌下 (卷第五)……………六六

冬歌 (卷第六)……………一〇三

賀歌 (卷第七)……………一三四

目次

哀傷歌	(卷第八)	一三三
離別歌	(卷第九)	一五〇
羈旅歌	(卷第十)	一五六
戀歌一	(卷第十一)	一七〇
戀歌二	(卷第十二)	一八三
戀歌三	(卷第十三)	一九三
戀歌四	(卷第十四)	二〇六
戀歌五	(卷第十五)	二二〇
雜歌上	(卷第十六)	二三三
雜歌中	(卷第十七)	二五七
雜歌下	(卷第十八)	二七三
神祇歌	(卷第十九)	二九六
釋教歌	(卷第二十)	三〇七

隱岐本御識語……………三二七

甘露寺親長本識語……………三二九

切出歌……………三三三

初句索引……………三三七